

通してください

木寺 諭吉

高浜虚子に「敵といふもの今は無し秋の月」の句がある。

終戦の年の八月二十二日の作だが、私も故回へ向かう船の上から同じような想いで秋の月を仰いだ。その時からもう四十二年の歳月が過ぎた。

若い時は年をとれば気分もそれなりに、その年らしくなっていくものだと思っていた。しかしどうもそうならない。いっこうに年寄りらしい気分にならなくて、時折妻に笑われている。この先老人にとって生きがいのある社会が実現するのか、住みにくい社会になるのか、世間が騒ぐほどには気にはならない。年寄りの気分にならないと言いながらもそれなりの感慨はある。

歴史の本をめくり、昔の変色しかかった写真などを眺めていると、あゝこの頃はこんな時代だったんだなあ、当時の人々の暮しぶり日に浮かんでくる。戦後の、食べるもの、着るもの、住むところいずれも生存ぎりぎりの水準で生きてきた経験、あとから思えば、それ以下はあるまいと思える生活でも、なぜか懐しい思いさえしてくる。

私は復員した時「生きて帰ったのだから、いろいろ欲は言えないが、あと五年ぐらいは生きていたいなあ」とそう思った。それがなんと四十二年も生き続けている。復員の途中いちばん驚いたことは、焦土と化した街の姿でもなければ、きびしい食糧事情でもなかった。それは故郷に向かう復員列車の窓から見た長い葬儀の列であった。人間が亡くなった時、こんなに大切に見送ってもらおうということを全く忘れていた私だった。

この現実を見た時、戦地でこの世を去った人々の無残ともいうべき最期の姿が脳裏に浮かび、熱いものが込み上げてくるのをどうしようもなかった。生きている限り生き残ったという実感はつきまとうだろう。

年月の差はあれ、人間の死の到来は“あとさき”のことだという思いはあるが、生きてくても生きられなかった、かつての時代、あの列車の中でのやるせない思いは、残り火のように今でも私の胸に燃え続けている。

生まれた順序にしたがって、死の行列に入ったとしても、人の死は悲しいものである。だが、私の母のように百歳を過ぎての死には、どこか戦い終えた、という気がして残された者には救いがあり、逆縁に見舞われた人の悲しみは深い。

人間の記憶というものには限界があって、かりに鮮明に今も残っているにしても、それが事実どおりであったかどうか疑わしいことは多々ある。粉飾された記憶の場合もある。粉飾されているからと言って事実どおりでないかもしれぬが、全部嘘であるということにもならない。

気七つ八つからカンテラ提げて抗内下るも親の罰

私がこの唄を耳にしたのは、小学校に入学する前後だったと思う。炭坑の納屋が建ち並び、遊び友だちも殆んど炭坑の子らだった。

深い地の底で働くヤマ人たちは危険な作業に明け暮れ、粉炭と煤煙、カンテラの篝火などで真黒になり、おのずと気も荒み、喧嘩も多かった。酔っぱらいも多かった。生活苦のためか学校に来ない子もいた。渡り鳥なら季節に応じてわが故郷に帰ることもできるが、親が死んでも帰れん人もいと、大人たちが話していた。

「食うに同することはなかったが、楽しみの極度に少ない、ただ生きて働いているだけのよな毎日だった」とかつての炭坑マンの老人は語った。

反面、長屋住いの共同生活者でなければできない、数々の人間愛もあつたし、心やさしいヤマの人々に可愛がられた記憶も随分とある。

「土人墓^{どじんぼか}に白いもんが落ちとつた、あれはなんな」と母に尋ねたことがある。母はしばらくだまっていたが「土人墓に行ったらいかん」と言った。私は母の言葉が、かすかに恐怖をおびていることを感じた。眼の奥にのこっているのは、暗い藤づるのまきついた山の木々のあいまに、ばらばらちらばって落ちていた骨らしいものの記憶あるだけだ。土人墓とは、いったいどういう墓なのか、当時の私にはわかるすべもなかった。後年それがよるべのない悲惨な運命^{きだめ}の人たちを埋葬したものであることがわかって、慄然とした。粗末な土まんじゅうの墓ともいえぬぐらいの土盛りがあるだけで、死者の氏名を記した木片すらない殺伐とした埋葬場所であった。

十月のことである。知人の家を出たのは夜の十一時をまわっていたと思う。日の浦の家々の灯りが見える土人墓附近にさしかかかったら、突然灯りが無数にちらつき、足が一步も前に出なくなった。急に体からすべての力が抜けていくのを感じ、その場に座り込んでしまった。灯りがちらつくだけで他は全く闇の世界である。激しい疲れを覚えた。私は視力の回復を待った。何も思い出したくなかった。とりわけ土人墓のことは、何ひとつ思い出したくなかった。ところが疲れて抑制のきかない頭は、遠く過去に押しやられていた少年の頃の断続的な記憶が、次から次へと甦って来るのである。私は眠っていたかも知れないし、軽く気を失っていたのかも知れずいづれにしても一時間近く意識が薄れていたのは、たしかだ。

かつて、しやく熱の異国で死ぬのではないかと恐怖に襲われた病臥の枕にあらわれては消え、消えてはあらわれた土人墓の幻影に、うなされながら眠った記憶がある。土人墓から怨霊が呼ぶとS君が言っていたが、土人墓はたしかに無気味な音を発した。不思議な夜であった。何故と私の身边にこのようなことが起きるのか、単なる偶然と思いたかった。うとうとしかけた私の耳にかすかに口笛が聞こえてきた。現^{うつ}のようでもあり、夢の中のようでもあったが、風に乗って聞こえて来る口笛に耳を澄ましてうちに、このメロディをどこかで聞いた覚えがあるような気がした。思い出そうにも記憶の定かでないメロディが、どうしてこれほど切なく胸に響くのだろうか。私は怨霊の存在など信じたことはないし、

幻覚や幻聴というものは人間が不自然な状態にある時、起こるものだと思っているのだが……。

ふとある事が脳裏に浮かんだ。私が幼い頃母は深夜に時折ご飯を炊いていた。その時は決まって粗末な服を着た、なにかにおびえた様子の若者が来ていたのを覚えている。父がいない夜などにはこの深夜の訪問者があると、子供心にもなんとなく不安で、家の中に入れなければいいのと思っていたものだ。ご飯を食べさせ、にぎり飯をつくって持たせてやる母の顔は、いつも決まって悲しそうな顔をしていた。母が話すことは道順とか、泳げるのか、舟は漕げるのか、というようなことを言っていた。若者が家を出て行くと仏壇の前に座り、必ず手を合わせていた。

当時島から逃げだす炭坑の鉱夫を監視するための見張り所あり、木刀などを持っていた人を見かけるのも、めずらしくなかった。昼は山にひそみ、夜になって逃亡するのだが計画がうまくいかずで、二日も三日も飲まず食わずの生活に堪えきれず、深夜の訪問者になるのである。逃亡する者にとって夜は天然の隠れ蓑になる。彼らは夜の闇の中で計画を遂行する。朝が訪れると山の中で不安な浅い眠りをまどろむ。朝になったら一日が終わり追跡者の探索いかんではすべてが終ってしまうのである。

寂しさに堪えかねたのか、若者がわが家を遠ざかりつつ吹いた深夜の口笛、いま私の耳に聞こえるのはあの時のメロディに違いなかった。

統計によると自殺がもっとも多い時刻は、夜明けどきだという。朝の訪れにせきたてら、あわただしくこの世に別れを告げてゆくのだろう。

人間が蒙るあらゆる傷のうちで、人間によって負わされる傷が、もつとも深いという。

目をつむると闇となり、目を開けると無数の灯りだけの世界が続いた。土人墓に埋められた人々の魂が、分け隔てなく等しく浮遊しているに違いなかった。死んだ人はものを言うことはないが、土人墓の人々はどんな思いを抱いて人生から退場して行ったのだろう。

私は背後に人の気配を感じ振りむくと幻影だろうか、そこには、ひどい身なりの若者の姿が間の中にあっただ。私は思わず両手をあわせて「通してください」と声を出した。

間もなく視力は回復し、息切れはおさまり、胸苦しさも消え、どうにか歩くことができた。風が運んでくる波の音がかすかに聞こえ、深い呼吸を繰り返すと地上を照らす淡い月の光も感知することができた。

これから先、何年生きながらえていられようとも、この夜のようなことに再び出会うことはないだろう。

天が、いったい何をどう配慮して、人間たちそれぞれの宿命を与えるのかわからないが、幸せのすぐ事側には悲劇が用意され、繁栄の背には必ず荒廃がある。

現在の社会は、かつてその歴史になかったいい時代を迎えていると思う。現状でいいとは、言わないが、今日が歴史的に最上の時代であるという思いは強い。

今後、石炭は私たち社会のエネルギー源となることはないだろうし、石炭が人間の素手で掘り出されていたことなど、知らぬ人たちが多くなっていくだろう。

わらじ、地下たび、靴と島の人々の生活も時の流れが変えた。私が子供の頃に栄え、その後、廃坑になった日の浦炭坑の跡は大きく変貌した。今はその片隅にわずかに昔日の名残りをとどめているにすぎない。

土人墓を、知っている人も、もう数少なくなった。

福岡在住のFさんは毎月のように土人墓を訪れるが、その理由については多くは語らない。だが「歴史が忘れてしまった、しかし忘れてはならない人間の物語が、土人墓にはある」とつぶやいた――。

文教いろは（長崎県松浦市福島町発行）への投稿文より